

仙界とポルノグラフィ

中野美代子



緑玉
瑤
薺



璜



仙界とポルノグラフィー

中野美代子

青土社

仙界とポルノグラフィー

©1989, Miyoko NAKANO

1989年6月30日 第1刷発行

1989年9月12日 第3刷発行

著者——中野美代子

発行者——清水康雄

発行所——青土社

東京都千代田区神田神保町1-29 市瀬ビル〒101

(電話) 291-9831 [編集], 294-7829 [営業]

(振替) 東京9-192955

印刷所——三協美術印刷

製本所——小泉製本

4-7917-5020-9

仙界とポルノグラフィ―目次

白い鸚哥	7
鯨座 ケトス の尾	35
龍と博山炉	63
北斗 まも の城	93
天子の動物園	121
「ディー判官もの」の作者	147
金属動物	171

人工洞窟
グロツト

193

瓢箪の宇宙

223

仙界とポルノグラフィ

247

煉丹術ドラマ

273

悲劇のウロボロス

305

あとがき

333

参考文献書誌

337

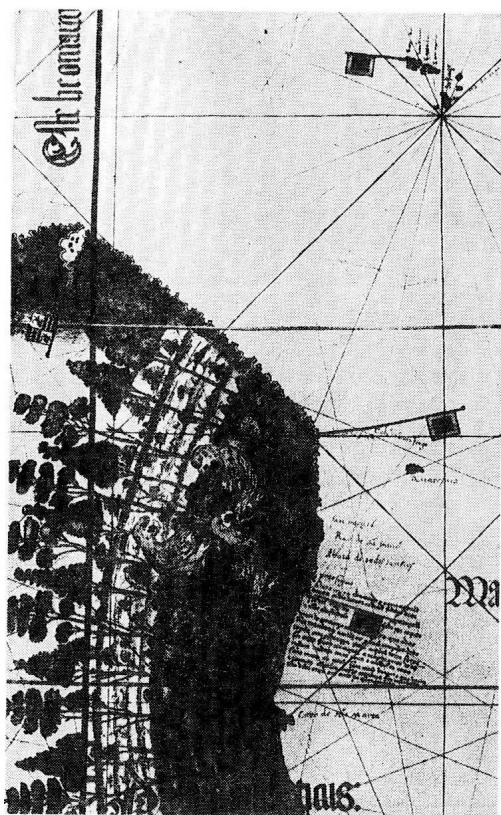
装画
野中ユリ

仙界とポルノグラフィ

白
い
鵜
哥

『西遊記』第四十二回、ご存じ孫悟空が紅孩児こうがいじ、号は聖嬰大王せいえいだいおうの退治に手を焼いて南海なる菩薩のもとに助けを請いに行く。菩薩は紅孩児の魔法の火を消すための水を浄瓶につめ、天界の托塔李天王たくとくたいてんおうから三十六口の天罡刀てんこうとうを調達し、準備万端ととのえたところで、「さあ、悟空や、つまらぬことを言っていないでわたしについておいで」と、雲に乗って南海を飛びたつ。そのとき、白い鸚哥いんごが翅はねを展ひらげ、菩薩の先に立って飛ぶのである。

南海菩薩の先導役となる白い鸚哥——『西遊記』のなかになにげなく書きつけられた鳥の名に、大げさに言えば、当時の世界中の航海家たちの、南方の未知の土地への夢と冒険が託されていたのだった。ちなみに、『西遊記』は十六世紀明代みんに成立し、現存する最古のテキストは一五九二年の刊である。私が見ているのも、もちろんそのテキストである。



▲アルベルト・カンティーノの手書き地図（1502）のなかの3羽のオウム

申すまでもなく、コロンブスによる新大陸発見は一四九二年であるが、一五〇四年までの四回にわたるかれの航海に刺戟されて、多くのスペイン人やポルトガル人が新大陸への探検航海に出かけた。ポルトガルのペドロ・アルヴァレス・カブラルの十三隻からなる船団がインドに向かう

*

途中、たまたま南米大陸の現ブラジル東岸に漂着したのは一五〇〇年。カブラルはこの地をサンタ・クルスと名づけたうえで一隻をポルトガル王マヌエル一世に報告するため帰国させた。その船は、国王への土産としてオウムを積んでいたので、新発見のその土地は「オウムの土地」(Terra de Paroquet)と呼ばれるようになったという。

カブラルによるブラジル発見を地図上にはじめて描いたのが、アルベルト・カンティノーである。ヨーロッパからインドまでを含むその手書き世界地図の新大陸の部分には、ごらんのように森林のなかに羽をやすめる三羽のオウムが描かれている。

ポルトガル人あるいはヨーロッパ人にとって、オウムははじめて見る鳥だったのであろうか。すでにギリシア人やローマ人はオウムを飼育していたが、プリニウスの『博物誌』によれば、インドから送られていたらしい。インド人はオウムに言葉を教えこむときに鉄棒で頭を叩くこと、オウムは、主人に繰り返しあいさつするが、葡萄酒のことを話題にするときにはとりわけ陽気になること、肢が弱いので着地のときには嘴をまず地面につけて体重を軽減させることなど、プリニウスは書いている。

あるいはまた、インドの説話集『鵲鵲七十話』がそのペルシア語訳(十四世紀初)を通すなりして、大航海時代のヨーロッパ人に、インドへの新たなあこがれをもたらしていたかもしれない。

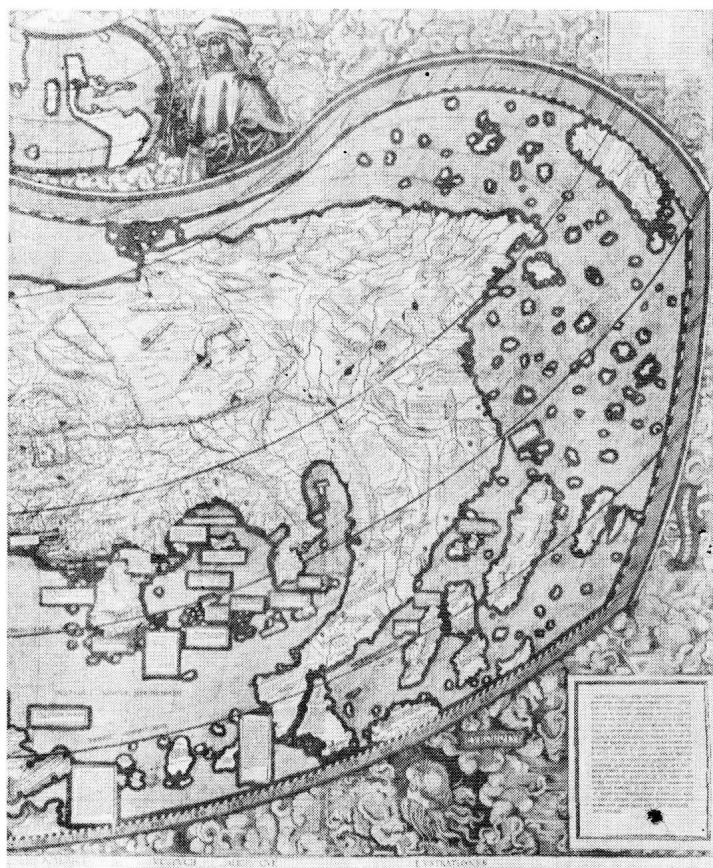
こうしてみると、ポルトガル人は、新しく発見したブラジルの地にオウムがたくさんいるのを

見て、「これぞインドだ！」と思ったのは疑いない。コロンブスも、第一回の航海で発見した島を、目ざすジパングではないまでも、その近くの南アジアの一部だと考えたのである。オウムそのものが珍しいというより、ヨーロッパに古代からオウムを供給していたインド、そしてジパングの近くに位置するインドという思いが、新発見の土地に「オウムの土地」なる名をつけさせたのであろう。

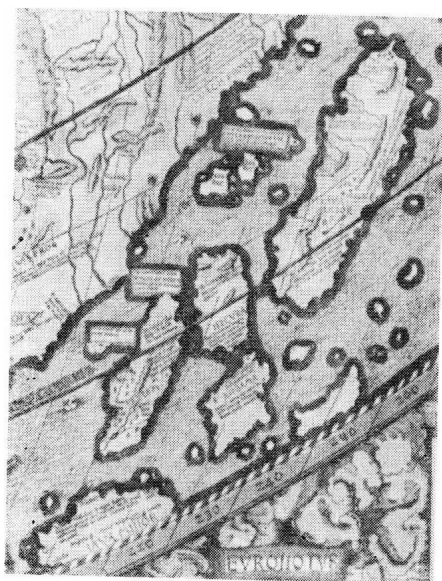
カンティエーノの手書き地図に描かれたオウムの絵は、十六世紀の印刷地図にもしばしば登場する。地図の印刷は十五世紀末からさかんになり、そのかなりのものはロドニー・シャリー（記）に収録されている。現代の正確一点張りの地図とはちがい、地図の空白部や周辺にさまざまな動物や怪獣などの絵を描きこんでいるのが楽しく、それをながめているだけで時を忘れる思いがするのだが、そのことはいずれ触れることになる。

マルティン・ヴァルトゼーミューラーといえば、十六世紀初頭の世界地図製作者として名高く、この『マッピング』にも数枚のかれの地図が収められている。そのもっとも初期の地図は一五〇七年刊のものだが、パッと見た感じはじつにごつくて無愛想ながら、よくよくながめると興味つきないことががぎっしり詰まっているようだ。

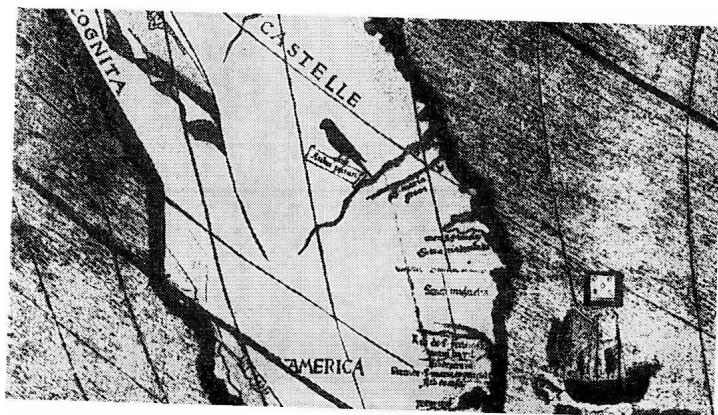
最東端にごろんとジパングリ (Zipangri) つまりジパングの大きな島があり、カタイ (シナ) やインドはプトレマイオスの地図を踏襲しており、プリニウスも言及しているタブロバネ島もイン



▲ヴァルトゼーミューラーの地図（1507）のアジア



◀ ヴァルトゼーミュラーの地図 (1507) の大ジャワと小ジャワ



▲ ヴァルトゼーミュラーの地図 (1507) の南米大陸

ド洋に描かれているが、南アジアについては、大ジャワ (Java Major) と小ジャワ (Java Minor) の二つがすでに描かれていること、記憶にとどめておいていただきたい。

この地図で目につくのは、アフリカ大陸の描きかたで、それもそのはず、ヴァスコ・ダ・ガマの喜望峰をめぐるのインドへの航海は一四九八年のことであったから、海岸線はぐるりヨーロッパ人の認識のうちにあった。そして大西洋をはさんで新大陸に目をやると、南北アメリカ大陸の東岸の一部が発見されただけの時代のこととて、西側は「未知」^{イノコグニツ}と記されたまま、おそろしくいびつで細長くなっているのは致しかたないとして、その南アメリカのブラジルあたりに、ポツンと一羽のオウムが描かれているのである。

『マッピング』の複製写真ではよく読めないのだが、そのオウムの足もとに小さく書きこまれた文字は、どうやら Terra de Paroquet であるらしい。カンティノの地図のオウムは、ちゃんと踏襲されているのだ。

ちなみに、この地図上に描かれている動物は、このオウムと、アフリカ大陸南部に描かれたゾウ一頭、そしてそのゾウの下の人々の群れだけである。ところが、同じヴァルトゼーミューラーの地図でも、一五一六年のシュトラスブルク版では、にわかに人や動物の絵が増えてくる。とはいえ、それら人や動物は陸上にはかり描かれ、海上には描かれない。いや、正確に言えば、アフリカ喜望峰の南の海上に、巨大な魚にうち跨りポルトガル国旗を手にしたマヌエル一世が描かれている。あとの海はすべて、ポルトラノ型海図の特徴として、海上の方位盤から放射線状に発せ